

310. 彦根藩の火薬庫



図1 調査中の彦根藩火薬庫「焰硝御土蔵」

1. 幕末の絵図

彦根藩は彦根城の北2km、佐和山の裾野、松原内湖との狭矮な谷地に火薬庫「焰硝御土蔵」を設けていた。幕末の様子を描いた絵図(図2)の左側の一連の建物が火薬庫の施設である。

詳細に絵図を見てみよう。山側の三方を瓦で葺いた塀で囲んだ区画があり、この内部に東西に細長い建物が並んでいる。この建物が火薬庫の本体である。火薬庫は5棟描かれ、いずれもが瓦葺である。ほぼ等質な建物が整然と並んでいた様子を描いたものであろう。区画の西側、琵琶湖に向かった一辺には塀は描かれていないが、中央には門が置かれている。ここから西に向けて直線的な道が伸びている。門に近いところに描かれた横線は階段であろう。

道を下りきったところに、松原内湖に半島状に飛び出すように造成され、土塀・石垣などで囲まれた施設が描かれている。絵図には特別な記載はされていないが、これは火薬製造所であろう。絵図では細長い瓦葺の建物が「コ」字状に配され、周辺に雑舎

が建ち並び、門は山側である東辺の中央に描かれている。

倉庫群と製造所との間は雑舎が数棟描かれているが、基本的には危険回避のための空閑地となっている。

製造所の南東隅に土塀と門が描かれている。施設全体の出入り口がこれにあたる。この門をくぐって、製造所の土塀に沿って設けられた道を通りそれぞれの門に達する構造となっている。なお、火薬の積み出しのため、内湖に面する個所に船着場が設けられていたと想定できるのであるが、絵図にはそのような施設は描かれていない。ただ近接する大洞弁才天の鳥居の下には船着場があり、船で参れるようになっている。同等の湖岸条件である火薬庫施設も荷の運搬に船を利用していたことは十分に想定できるであろう。

同じく絵図には、佐和山麓と松原内湖に挟まれた狭い地に藩士の名が書かれた区画がある。有力藩士に与えられた下屋敷と考える。ただ一般の下屋敷とは異なり、火薬製造・管理にあたった藩士の下屋敷が置かれた様子を描くものであろう。

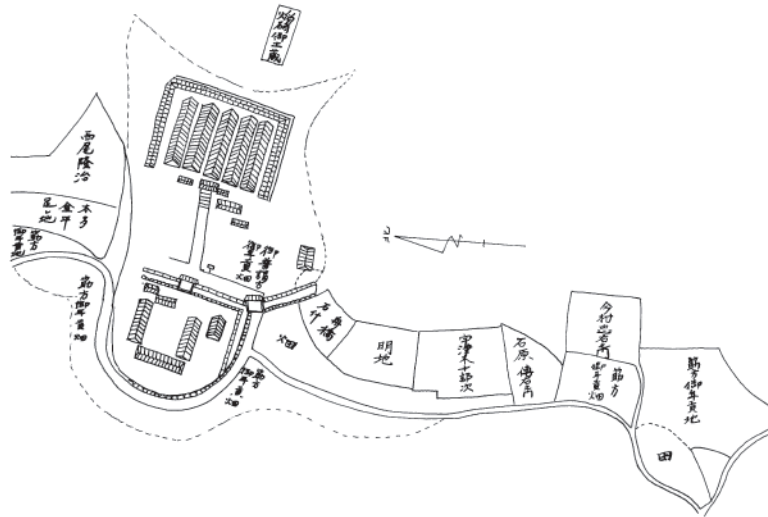


図2 「火硝御土蔵」の絵図（松原町蔵）（彦根市史より転写・加筆）

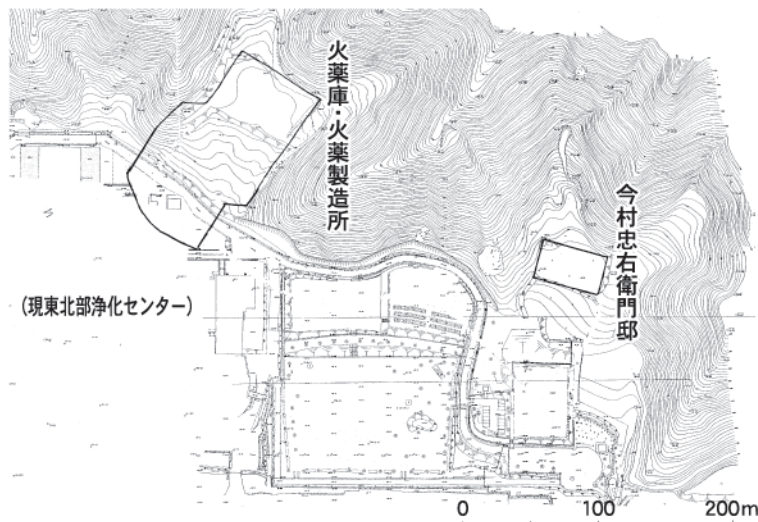


図3 火薬庫・火薬製造所・今村忠右衛門邸の位置

2. 幕末の彦根藩

寛政7年（1795）の井伊家資料に、武家奉公人の組織の中に御玉葉仲間120人・鉄砲治し1人、御火硝小屋番10人の記述が見られる。

また、文化11年（1814）の「掌中秘録」（井伊家文書）に記された彦根藩の軍編成の中から火薬に関する軍備を抽出すると、全軍一ノ先から大殿様御手廻りまで九大隊編成で、鉄砲970挺・玉葉箱97荷・玉葉仲間97人である。

このあたりが、彦根藩の江戸中期から後期にかけての火器保有量であったと考えられる。具体的な火薬量を推測すると、鉄砲10挺につき玉葉箱1荷である。玉葉仲間とは玉葉の運搬人であるが、1人1荷を運搬している。荷車を使わず担いだものと考え、1荷は20kgが妥当なところであろうか。となると、

彦根藩は1回の出撃に鉄砲1挺あたり2kgの火薬を準備し、総量約2tの火薬を運搬したと計算できる。火薬庫に保有した火薬の量は、数回の出撃分と考えられるから、10t程度の火薬量を保有していたと推定できるのではないだろうか。これが、彦根藩の平時の火薬保有量を表すのであろう。

19世紀中頃、日本近海に異国船が頻繁に出没するようになり、鎖国政策をとる幕府にとってその対応におわれるようになる。彦根藩は幕府の中核としてその対応にあたり、その軍備は一転する。

弘化4年（1847）十二代藩主直亮（なおあき）のとき、彦根藩は相模国海岸警衛を命じられ、相模・安房・上総において異国船の対応にあっている。このとき彦根藩が整えた警備体制は2,500人近い軍勢で、火器は大小砲176挺とある。ただ、この時点で配備された火器類はいずれも旧来の銃砲類であったも

のと考えられる。

2年後の嘉永2年(1849)、高島秋帆の弟子である成瀬平三を彦根藩に招へいし、西洋砲術の導入を図っている。平三が行ったのは、砲台の建設、西洋砲術の教授、西洋式大砲の鑄造などである。台場には、彦根晒山や藩領の佐野(栃木県)で鑄造した西洋式大砲のカノン砲やホーイッスル砲などを備え、また新しく西洋鉄砲組も編成している。

ここに来て、彦根藩の軍備は、西洋技術を取り入れ、鉄砲・大砲などの導入を中心とした近代化が図られたことが伺われる。

平三の手によると考えられる西洋火器の設計図の中には、馬で引く弾薬車も画かれている。近代化し、大砲を多数配備した火器は、前記の玉薬箱で運ばれたのとは桁違いの量の火薬を必要としたことが伺われる。

火薬の製造にあたっては蘭学の科学者木村長蔵を20石3人扶持で召し抱え、安政4年(1858)火薬製法御用掛として火薬の製造に従事させている。この火薬も彦根で製造しているがこれが、上記の火薬製造所であろう。

火薬庫の設計も長蔵の手によるものであろうか。彦根藩の火薬庫は細長い建物を複数棟、何の遮蔽物も設けずに並べている。誘爆などを恐れて、個別に土塁等で囲う火薬庫の例が多い中、特異な形態ともいえる。

3. 明治の記録

幕藩体制の崩壊後は、火薬庫の火薬は明治6年(1873)明治政府陸軍により伏見に移転したことが琵琶湖新聞第八号(明治六年五月)に下記のように載っている。

「彦根屯所官員并二歩兵第十大隊伏見へ移転ノ儀、陸軍省ヨリ大阪鎮台へ御沙汰アリ、依テ追々弾薬等差送りニ付、此日ハ湖上蒸気船通船留メニナリ、又道筋休泊ノ所ハ格別、其他焚火ノ儀相成ラザル旨、布告アリタリ」

さらに、明治9年(1876)大阪火薬商人粟田家品蔵によって残りの火薬が堺県に運び出されている。このときの火薬類の量は2,066貫目(約8トン)である。前出の運び出された量は不明であるが、江戸時代末期彦根藩が莫大な量の火薬を貯蔵していたと想定するのは簡単である。建物は明治11年(1878)に払い下げられている。

「工兵第四方面第二園区管地調明細表」明治11年(1878)の備考には「尤佐和山口ヲ出、市村凡二十町ヲ隔テ松原村埋葬地並旧火薬庫地あり」の記述が見られ、「彦根城付属宇大洞火薬庫實測地圖」が付属している。実測図は火薬庫の外形と区画が描かれ、実測

地積は2,972坪5勺5才(約9,800㎡)とある。ここに記された大洞火薬庫は前出の絵図の「焰硝御土蔵」と一致する。

4. 「今村忠右衛門」

図2の絵図に「今村忠右衛門」と記された下屋敷がある。今村忠右衛門家の本屋敷は寛永21年(1644)には東中島、嘉永6年(1853)には内曲輪内に構えているので、絵図中の屋敷は下屋敷となる。下屋敷とは本邸以外の屋敷であり、彦根藩の上級藩士「笹之間詰」「武役席」などに与えられた屋敷である。

「侍中由緒帳」によると、今村忠右衛門家は今村源右衛門正成の弟正相を初代とし、以後代々、今村忠右衛門を襲名し、八代正幹で幕末を迎えている。おおむね五百石前後を拝領し、代々母衣役(ほろやく)を命じられ、筋奉行などを勤めている。約60人いた「武役席」格の藩士の一人である。鉄砲足軽組を30人から40人抱え、文化11年の軍勢表では御旗本先で鉄砲隊を率いている。「侍中由緒帳」では火薬を取り扱う役職に就いた記載を見出すことはできないのであるが、下屋敷の配置から、今村忠右衛門家が幕末、火薬の製造・管理を司っていたと考えられる。

直接、火器軍備品を扱うのは「御鉄砲奉行」として110~120石の士が2人、「御鉄砲玉薬奉行」「御鉄砲玉薬煮合奉行」として100~150石の士2人、「御玉薬仲間頭」として50~80石の士2人である。これらの取りまとめ役が今村家であったのであろうか。

5. 調査の状況

平成13・14度の松原内湖遺跡の調査は「火薬庫(焰硝御土蔵)」と「今村忠右衛門邸」を対象として実施している。調査は現在進行中であるが、これまでに下記のようなことが分かってきている。

6. 「火薬庫」の調査

火薬庫の置かれた平坦地は約40m×60mの広さである。谷の最深部を削り広げるように造成して作られたもので、北・東・南の三方は山に取り囲まれ、西の一方は琵琶湖に向けて開放している。

火薬庫の建物は長さ29m幅4.5m高さ20~30cmの石積基壇として3棟分を検出した。いずれも土塁・総瓦葺で、規模・構造共に同じ仕様の蔵が並んでいた状態である。絵図には5棟の蔵が建ち並んだ様子が描かれているが、検出されたのは3棟である。比較的地の当たる北半分は後世水田となったため削平されてしま

っており、建物遺構は検出することができなかったためである。この北半分の余地にあと2棟建てることは十分にできる。絵図は建物の棟数まで正確に記録したものであろうか。

建物はいずれも等質と考えられるが、細部を見ると、基壇に用いられた石材が南側の建物ほど小さくなり、組み方も粗雑になることが観察される。用いられた石材は湖東流紋岩と呼ばれる石質で、古くから建築材として好まれて用いられてきた石材である。火薬庫の置かれた佐和山の岩質はチャートであるため、この石材は他所より搬入してきたものであるが、石材の追加搬入を待たずして建築を進めた様子が伺える。火薬庫の建設が急務であり、また相模国海岸警衛などが藩の財政を逼迫させていた様子を伝えるものであろうか。ちなみに、彦根城の石垣もほぼすべてがこの湖東流紋岩で築かれている。彦根山もまたチャート質の岩帯であるため、すべてが搬入されてきた石材である。その石材の量・大きさ共に当火薬庫に用いられたものとは比べ物にならない。彦根城築造当時の井伊家の持ちえた権力・財力の大きさに改めて驚きを感じる。

この火薬庫は19世紀中頃に建てられたものと考えられる。調査ではさらに前身建物の存在が確認されている。建物自体の基礎遺構などは検出されていないが、前述の火薬庫の造成土中に大量の瓦堆積層が観察され、また前庭空地の谷のひとつがすべて前身建物の瓦で埋め尽くされていることも分かっている。

出土している陶磁器から、この建物は18世紀の後半に建てられた建物である。施設の基本的な配置が同じであることなどから、これもまた火薬庫と考えている。彦根藩は18世紀の後半に松原の当地に初めて火薬庫を設置し、19世紀の中頃に拡大造成し建物も全面的に建て直していることなどがこれまでに明らかになりつつある。

石田三成の火薬庫も当地に置かれていたとの説があるが、18世紀をさかのぼる施設の存在は検出されておらず、これについては否定的な調査結果となっている。

7. 「今村忠右衛門邸」の調査

図3に示すとおり、やはり谷奥を造成して平坦地を作り出し屋敷地としている。内部に礎石等はほとんど残されておらず、土台下部および壁の塗下ろし部分に置かれていたと考えられる湖東流紋岩の小石材の並びから、ようやく建物の位置・規模が読み取れる。

広い敷地であるにもかかわらず、ほぼ、敷地いっ

ぱいに建物が建てられていた様子が伺える。瓦の出土量は少なく、建物は軒先など一部分のみが瓦で葺かれたものである。

この屋敷地の築造期は遺物量が少ないことから明確に確定することは難しい。近くに17世紀～18世紀の陶磁器などの廃棄場所が検出されたが、この遺構は近くで検出された近世墓に伴うもので、遺物はここから出されたものと考えている。

今村忠右衛門邸の下層からは近世墓のみならず奈良・平安時代から室町時代、いずれもの時代の古墓を多数検出している。明治の記録にも松原村埋葬地として記されているが、1000年近くの長きにわたって墓域となっていたところである。返してみれば近くに民家はなく、危険を回避して火薬庫を設置するのに適した場所でもあったのであろう。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 横田洋三)

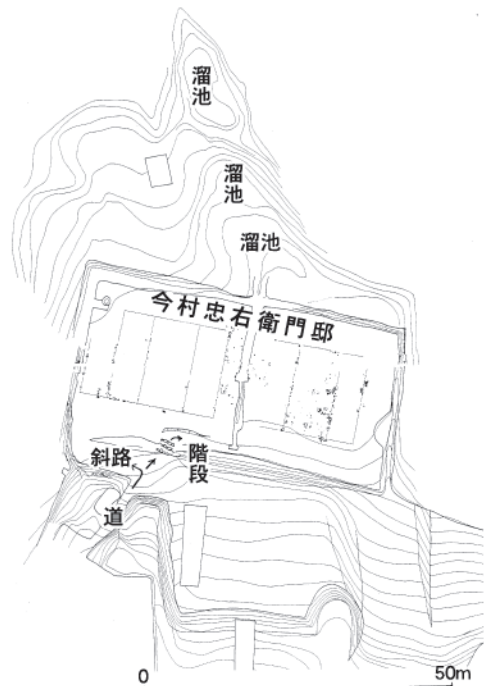


図4 今村忠右衛門邸発掘調査平面図

参考文献

- 「松原内湖遺跡発掘調査報告書1」
滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会
平成5年3月
- 「松原内湖遺跡発掘調査報告書2」
滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会
平成4年3月
- 「彦根市史 上・中・下巻」
彦根市役所 昭和39年3月
- 「彦根藩資料叢書 侍中由緒帳4」
彦根城博物館 彦根市教育委員会 1997年3月